ぼえ犬通信 Vol.33

2012年9月28日
FREE+♥ きもち
ぼえ犬通信
特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋

とくしゅう

手紙（てがみ）

ある日　届いた手紙
届かなかった手紙
読まれなかった手紙
北斗七星のちょっと下あたりに
置いてきた

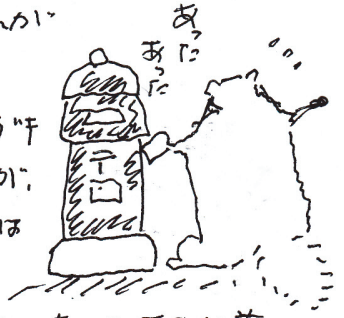
配達人の手によって
届けられる手紙
引き出しのなかで　開けられないことを
ぢっと待っている手紙
あした　浜辺にうちあげられるかもしれない

まいにちは　こんなに単調で
寝て　起きて　食べて　うんちして　また食べて
寝て
誰かのことばのじゃなく　じぶんのことばで
生きたい　と
思いながら　また食べて　寝て

今夜　風がはこぶ手紙のように
季節がめぐる
誰かから　誰かへ
誰でもない誰かへ

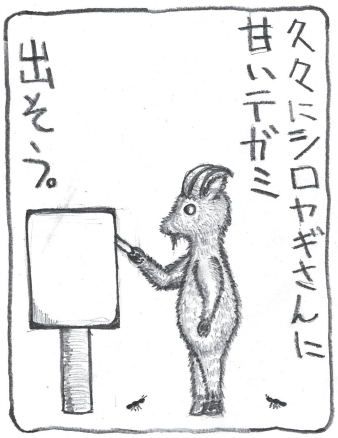
ももんがみつうしん

間借り版（おじゃまします）
臨時増刊号
発行：いいだかずみ

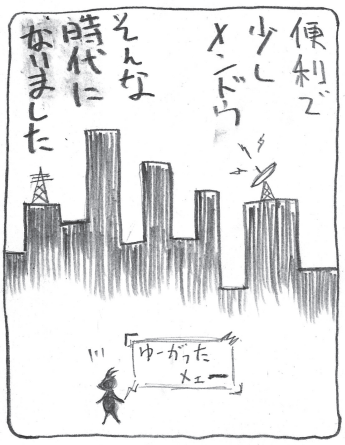


こんにちは、ももんがかずみです。
私は手紙やハガキをよく出すのですが、いつも気になるのはポストです。
郵便局の前など、あってあたり前のところもありますが、道端のあまり目につかない場所にひっそりといたりして。
ポストの場所はいつ誰がどうやって決めているのか？新たなポストを発見するたびにこれはいつかきいてみないとイカンなあと思うのであります。最近、愛用していたポストがなくなりました。あれがなくなると困るんです。嘆願も添えて日本郵便におたずねの手紙を書こうかしら。

テガミ



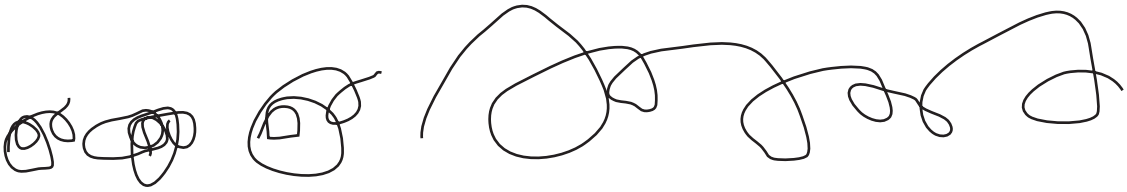
クロイフク



いいだかずみ
長野県から何を思ったか2006年突如大阪へやってきました。失業して先ゆきまっ暗な中、釜ヶ崎で拾われて心やさしきおじさんたちに支えられつつ絵をかいています。みなさまありがとう。

クロイフク
暇な喫茶店で過ごすことを主な生業にし、流れ流れてココルームでも同じように過ごしています。来てくれる人たちに感謝。

手紙



An さんの手紙
「ゆうちゃんこれ宛名書いてぇや」An さんが出す手紙は、生まれ故郷の、彼が育った学園の園長先生宛だ。封筒の中には、彼が好きなヒーローの記事の切り抜きや、最近はまっている動物の雑誌、彼の絵が載ったカマン！メディアセンターの通信などが入れられる。An さんには数字の計算が難しいため、切手をどう貼るのかも一苦労。また、An さんの話はファンタジーのように語られることが多く、彼にとって時間がどう流れているのかもつかめない。彼の人生が、実際のところどのようにあったのかも、何度話を聞いても (一般的に言う正確さでは) つかめない。それでも、郵便局の人や、ココルームにいる人の手を借りて、何ヶ月かに一度、奇跡のようにふとその手紙は届けられる。彼の幼少期があるその場所に。

両親との手紙
実家を出て暮らしはじめて、もうすぐ 10 年になる。母からの手紙は、絵葉書であることが多い。棚の整理をしていて絵葉書をみつけた時に、ぱっと書いてくれるらしい。まわりの近況を伝え、私の健康を心配してくれる。父からの手紙は、封筒に入っている。何か送るべき書類があるときなどに同封されることが多い。それは何か熱を持った手紙で、私のこれからを思ってくれる文章だ。私は二人からの手紙を読み、涙を流してしまう。こう書いてみるとお決まりのようでなんだかなと思うけど、その流れを私は止めることができない。そしてそんなに心動かされるくせに、私は返事を書くことができない。まれに私が手紙を送ると、それは実家の冷蔵庫に、その後、半永久的に、マグネットでとめられることになる。

Tk さんの手紙
8 月の「お手紙を書く日」にやってきた Tk さん。最初はいつものように、スタッフへの愛のメッセージを書き連ねていた。「お母さんに手紙書いてみたら？」こてがわさんの一言をきっかけに、Tk さんはもくもくと鉛筆を走らせはじめた。Tk さんは高齢で病気を抱えたお母さんと二人暮らし。幼い頃に障害を持ち、お母さんひとりに育てられた。「書けた！」と Tk さん。Tk さんの丸くころころした字で書かれたその手紙を読む。「今まで迷惑かけてごめん。最後まで面倒みるからね」私は心をゆらされて、Tk さんの顔を見る。すると Tk さん、にこにこしながら泣いていた。「うわー Tk さん、泣いてるやん」とティッシュを渡す。かなよさんも一緒になって、「うわーいいなぁ」とみんなで笑う。こてがわさんがその手紙を封筒に入れてくれて、お母さんに、と Tk さんに託される。Tk さんはお母さんにわたしただろうか。

けじめの手紙
何かのけじめに、思うのは手紙のことだ。そこに書く言葉を頭の中で繰り返して、やっと自分の気持ちを整理しているところがあるのかもしれない。けれど結局は、書くということは何かを書かないということ、と恐れて、勇気が持てず出せないままにあることがほとんど。

宛先を書くことができない手紙
釜ヶ崎の夏祭りと越冬まつりの時に、ココルームがひらく習字コーナー。訪れた人に、半紙にすきな言葉を書いてもらうのだが、中に、過去に親しかった人に向けた手紙を書く人がいる。今はもうどこにいるのか分からない人や、届けることのできない相手を思って書かれる手紙は、何年も書かれる日を待っていたかのような手紙だ。その言葉は書き手の外に出されるべき言葉だった、と思わずにはいられない言葉たち。この世界にはポストに投函される手紙、手渡しされる手紙、日々を行き来する多くの手紙がある。そして、書かれなかった手紙、宛先を失ってしまった手紙、日々この世界に沈殿してゆく手紙がまた多くある。

植田裕子
1985 年滋賀県彦根市生まれ。2011 年よりココルームスタッフ。日々いろんなことに悩むけど、練習と言い聞かせやってます。朝に弱いけど、歌が好きです。今の将来の夢は、暇な喫茶店をつくることです。

嘘つきと文机

震災後に移住してから手紙を書くことが多くなった。
10年住んだ東京を離れ、移住したのは瀬戸内海の島。借りた古民家には古い小さな文机があった。紙とペンでゆっくりと文をしたためたい、そう思わせる机。島では知人が自然農でみかんをつくっている。手紙を添えて、友人たちに送ることにした。

ごきげんよう。どうしていますか？こちらはのんびりしたものです。庭を畑にしてささやかに野菜をつくっています。縁側の向こうはすぐ山になっていて、斜面は見渡す限り柑橘の畑。鳥が鳴きやみません。石油ストーブで豆を煮たり芋をふかしたりしながら本を読むのが毎日の楽しみです。東京とは、違う時間が流れています。

しかしいいことばかりではありません。田舎の人づきあいはとても煩わしいものです。井戸水は雨が続くと濁ってしまうので、いつも水を貯めておく必要があります。畑仕事も億劫になることがよくあります。八百屋さんは5時には閉まるし、土日は決して開けません。だけど、そんな「面倒くささ」を引き受けることで得られるものが、今はとても大事なことであるように思っています。東京の慌ただしさのなかで損なってきたものを、どこかで嘘をついて見ないようにしていたものを、取り戻していけるように思うのです。

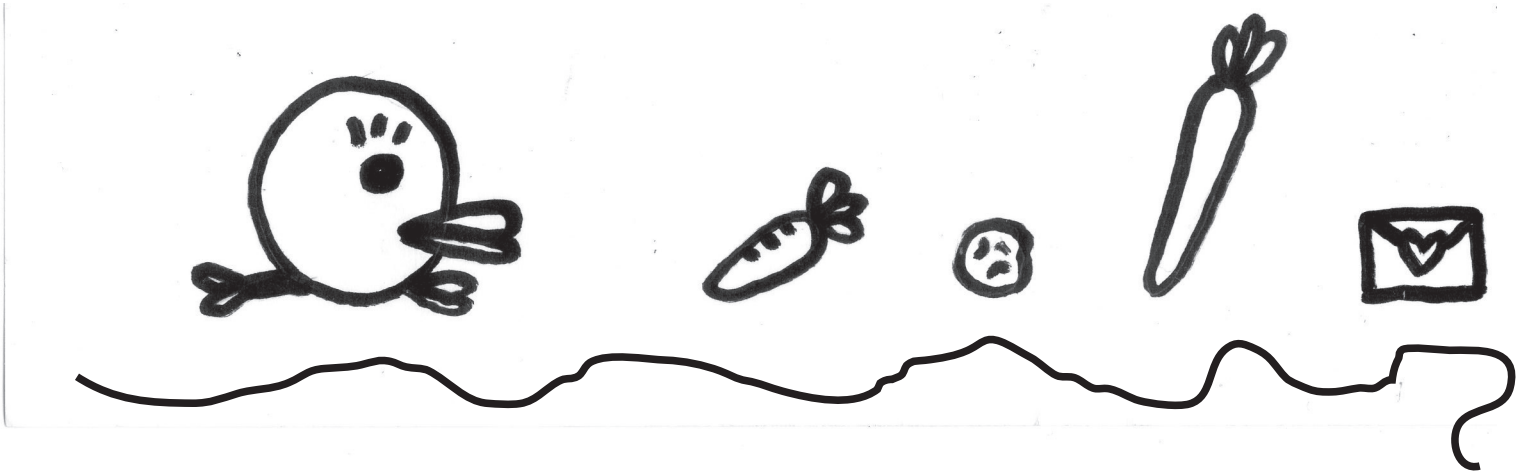
筆が走った。伝えたい。もっと。自分が選んだこの暮らしの喜びを、みんなに聞いてほしい。
この暮らしの、喜び。そこに嘘はなかった。でもそれなら、一人でかみしめていてもよさそうなものだ。だけど、ひっきりなしに人に伝えた。急き立てられるように手紙を書いた。そうしなければ、毎日を保つことができなかった。
農のある暮らし。匿名性によって動く消費社会を離れて、顔の見える人のつながりに生かされること。緑、土、広い広い空。実際に体験したそれは、間違いなく大事なものだった。
だけど。
自分がいまやりたいのは、そんなことだったっけ？コンクリートの中を人が忙しなく行き交う都市に、もう価値はないのか。東京が嫌いで離れたわけじゃない。僕が好きだった都市っていうものは、3.11を境に価値を失ったのか。当たり前だけど、そんなわけがない。なのに、僕はそこに戻らない理由を考え出すことに一生懸命になっていた。
人が訪れては去る。目まぐるしく関係が動く。そのことで地域が維持されていくような、都市にしかない動的なあり様。そしてそんなことを担保するような、場所。僕の興味はずっと、そこにあったんじゃなかったっけ？
夏祭りに合わせてココルームに来た。働かせてほしいとお願いした。もう嘘をつきたくなかった。

島から船で40分の距離に尾道の街がある。島には若者がほとんどいなかったけど、尾道では同世代の仲間がたくさんできた。
釜ヶ崎から戻って、引っ越しの日まで10日しかなかったのだけど、送別会を開いてもらえた。「前から関わりのある団体に誘ってもらえたから、行くことにしたよ。」みんなにはそう言った。僕から志願したのが事実だ。尾道が嫌で離れるわけじゃないということを強調したい気持ちから、そんなふうに言ってしまった。嘘をつかないために行く、その間際に、僕は少しだけ嘘をついた。
何人かが餞別の品をくれた。その多くに手紙が添えてあった。送別会によくある強制的な寄せ書きなんかとは違って、本当に伝えたいことだけを書いてくれていると思った。嘘をついた自分を、少し恥じる。

引っ越し当日、送別会に来ることなく、連絡もなかった友人から、メールが来た。とても、とても悲しいことがあって、顔を出すことができる状態ではなかったのだと書かれていた。
言葉を尽くして返信した。いま届けられるのは言葉しかない。この人のために、僕が紡げる言葉。僕を保つためじゃなく、あなたのために紡ぐ言葉。手紙というのは、本当は、そういうふうに編むものなのだと思う。

僕がいま暮らす部屋に文机はない。いたずらに手紙を書くことはもうないだろうと思う。何かの拍子に「あなたのための言葉」が湧き出ることがあったら、そのときはココルームのちゃぶ台でも借りてしたためることにしよう。そのときはきっと、嘘をつかずにいられると思う。

茂木秀之
1983生まれ、専業迷子。演劇とカフェと社会保障に興味があり、だいたい全部ありそうなココルーム来て2012年10月よりスタッフに。311から移動しすぎて定住する気がなくなってきたけど小沢健二の次のコンサートのときは日本にいるつもり。



りょうこさんからのお手紙

でも、ブルーギルの稚魚たちが、ドブ川の流れ込むところで光っています。君の住む鮎川村にはブルーギルはいないでしょうから、ブルーギルを食べたいと思ったら、また僕のところに来てください。ブルーギルの味をまだ知らない子供たちも連れて。

思川より。

渡邉義邦　１９８４年５月１日生まれ。「わたなべよしくに」で歌を歌っています。主に左足でサッカーボールを蹴り、右手でお箸を持ち、夜中に一人でもトイレにいけます。２０１２年10月よりココルームスタッフとなる。

でもたたかいは これからです

去年の３月、大震災の後に、ココルームを訪ねた。
着いた日の夜は、スタッフと遅くまで語った。農園の近況を語り、ココルームにやってきたことのある僕の関係者の状況を語った。翌日はカマメで、震災のことを取り留めもなく語る会を開いた。関東から来た人間ということで、僕が口火を切ることになった。

前日どうしようか思案した。震災以降僕の頭はずっと混乱していた。そのため、状況を整理するような、うまい言葉は出てこなかった。
だから、手紙を読むことにした。東北の友人、関東の友人から震災以降、僕に寄せられたメールのうち、書き手がココルームに来たことのあるものを、みんなで読むことにした。

書かれている文字を読み取り、口をあけて、体を震わせ、声に出す。
すると、文字が声に変換されて、耳の中に響く。いつしか身体と、心が震えていた。
その手紙を僕が文章として読んでいるときには伝わってこなかったものが、伝わってきた。
その身体の運動の先に、書き手の存在を感じた。声を発する中で、声に出せない自分の中に詰まっていることを感じた。

共感とは、その瞬間だったのだ、と思う。
そこに一緒にいる人に親密さを感じ、そこにいない書き手のことを身近に感じ、そして自分自身の整理できない感情と出会った。

新幹線に乗って気づいた。自分がやったのは郵便配達人の仕事で、宛先が一つでない手紙を、釜ヶ崎に運んだ。
東の「遠いところ、弱いところ、小さいところ」から、西の「遠いところ、弱いところ、小さいところ」へ、手紙を届けた。
さながら、カマメは、もう一つの別の郵便局のようだった。

****

うまい手紙を書くというのは、嘘をつくことに少し似ている。
美辞麗句で読み手を酔わせたところで、それは束の間のことに過ぎない。

誰に届くかわからない文章と違って、手紙には宛先が存在する。もちろん宛名は一人でなくてもいいし、また誤配されることだってある。
それでも、宛先は存在している。

読み手を酔わせるのではない、読み手と震えることが出来たときに、手紙は宛先に届く。
2011 年の３月のカマメでは読まなかった、東北に隣接する地域に住む知人が、震災直後に送ってくれた手紙の末尾は

「でも、たたかいはこれからです」

で、結ばれていた。その言葉を声に出した時、その人の覚悟が伝わり、僕自身何かを覚悟した。震わされると同時に、励まされていた。

****

山王夜回りにしても、こころのたねとしてにしても、ココルームが現そうとする表現には、不特定多数に向けられたものではなく、一般論で語られることでもなく、そこには常に生々しい実体のある宛先が存在している。
ココルームは、行く場のなくなった手紙が集まる、郵便局のような場所なのかもしれない。
行き場のない言葉が手紙として持ち込まれ、それがもう一度宛先をもった手紙として運ばれる。持ち込まれる手紙たちと、配達される手紙たちの発するそのざわめきの中で震える。そのざわめきの中で、生きることを励まされる。

言葉が本当に氾濫している今、ココルームにいると、自分の書く文章は、本当に宛先があるのだろうかと考える。

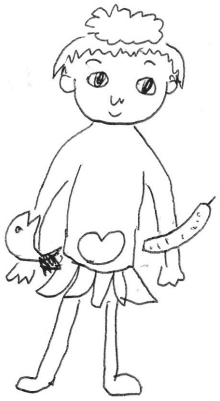
さて、この文章は宛先のある手紙になれるのだろうか。
僕が書きながら、思い浮かべた人に届くのだろうか。
僕が書きながら、思い浮かべなかった人に届くのだろうか。

いずれにしろ、誰かに届けば幸福である。

猪瀬 浩平
(見沼・風の学校 /cocoroom 北浦和準備中)
見沼・風の学校 / 見沼田んぼ福祉農園事務局長として、毎週末見沼田んぼで農作業。
明治学院大学教員として、毎年夏に学生と一緒に釜ヶ崎にやってくる。最近、埼玉北浦和の商店街のど真ん中に住み始めた。裏側スナック・呑み屋街で、個性豊かな人々にもまれる日々。

かっぱへ

なんだかすごく長い間眠っていたような気がして、ウシガエルのお爺さんに尋ねると、十七年も寝ていたと聞いてとても驚きました。その間に君がくれた手紙を、何度も読み返しています。子供の名前、二人共良い名前ですね。お父さんが亡くなられたこと、残念です。



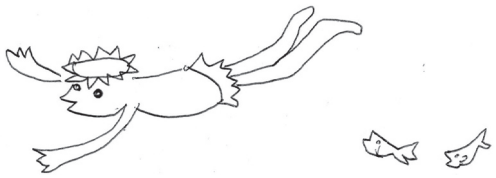
まだ若い君のお父さんとお母さんが、梅雨の増水を利用して僕のところに来たことを覚えています。長い移動で疲れた君のお父さんとお母さんは、流れの早い野洲川から逸れて、流れのゆっくりな僕に入ってきました。村の中を通る小川が僕に注ぎ込むところには、たくさんの魚がいました。その魚をお腹いっぱい食べて、葦原に簡単な寝床を作ってすぐに眠りにつきました。でも、夜中に目を覚ましてしまいました。たくさんの蛍達が飛び回っていて、夜なのにまるでお昼間のようだったからです。それを見て、君のお父さんとお母さんはここで暮らそうと思ってくれました。

やがて君が生まれました。とても元気がよくていつもどこかにすり傷がありましたね。魚を捕るのがとても上手で、お父さんと魚捕り対決をした時は（丁度、鮎が上ってくる季節でしたね）、何十匹も捕るものだから、村の人達にお裾分けをしましたね。あれは捕り過ぎでしたね。

五月のお祭りに、人の子に混ざってお神輿を担いだり、琵琶湖の花火大会を見たり、濡れた身体のまま籾殻（もみがら）の山に飛び込んで、籾殻まみれになったりしながら君は大きくなっていきました。

君が十歳になった年、蛍が一匹も飛ばなくなりました。鮎も帰って来なくなっていて、君たちが食べるものは大分少なくなっていました。魚がもうブルーギルだけになってしまった時、君のお父さんとお母さんは生まれ故郷である野洲川の上流の、青土ダムの向こうの鮎川村に帰りました。「僕はブルーギルが好きだから」と君だけ残ってくれましたね。

でも君も、鮎川村に行く日が来ました。それが十七年前のことで、ブルーギルもいなくなった日のことです。



そこで僕の記憶は曖昧になります。僕の中は、生ぬるくて重たいものでいっぱいになりました。何か言いたかったけど、もう何も言うことができませんでした。朦朧とする意識の中でウシガエルのお爺さん（もうその頃からお爺さんでしたね）を見たような気がします。心配して見に来てくれたのだと思いますが、僕の臭が酷いのですぐに帰ってしまったようです。それが僕の最後の記憶です。

くすぐったくて目が覚めました。まるで夏のように暑い日でしたが、太陽の角度から五月の始めの頃だと分かりました。子供たちの小さな足が、僕をくすぐっていました。その感覚がそれだと分かっても、僕は夢を見ているのだと思いました。だって、誰も寄り付かなくなった僕に、たくさんの人間が入ってくるのです。何をするのかと思ったら、枯れて腐った植物やゴミを拾っていってくれるのです。

それは毎週日曜日の朝に行われました。十三・八kmの僕の全部で、子供達がゴミを拾い、大人達が大きなゴミを引っ張り上げ、川原の草刈をしてくれました。よっぽど強い雨の日以外はそれが続きました。そして、忘れもしません、六月七日のことです。七十キロものカワニナを僕に放流してくれました。君が小さい頃はいくらでもいて、おやつがわりに食べていたカワニナです。

魚たちはまだ多くはありません。蛍たちも来年、再来年くらいでは飛ぶことは無いでしょう。

表紙　手紙　ココルームの人達に

突然、きた私に　働く場所

くれ、

突然　きた私に　ご飯を作ら

してもらい、

突然きた私に　おっちゃん達は

普通に　しゃべって、笑って

突然　きた私が、お客さんに

自己紹介してて、

突然　きた私が、ワークショップ

を　せらせてもらい

突然きた私は、ここみちゃん

と遊び、こはるちゃんとしゃべって、

裏　私の、子どもと一緒に遊んでる。

変な　ココルーム。

変な　おっちゃん。

変な人ばっかり。

お茶いつも出してくれる。

ちっちゃい　ごきぶりいっぱいおる。

誰も　あんまり　気にしてない。

変なの一。　クーラーなくて　汗た

れながら　人は集まる。

私も一緒やったわ。

だから　ココルームに　人はいつも

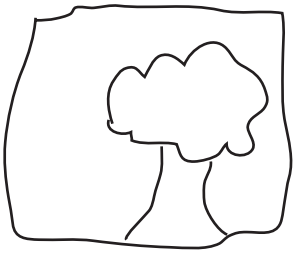
おる。　名前　おぼえてくれた。

私も、居れた。

ありがと一。　山口諒子

山口諒子
1980年7月31日
生まれ。しし座。
子ども3人。趣味は織り物、カポエイラ、ディジュリドゥ。好きな事は自転車でウロウロする事と、ごちゃごちゃしてる所から掘り出し物を見つける事。

肉屋の始末



(略)
手紙を
動詞にしたくて
手がむ にしました

あなたに手がむ
あなたに手がむ

日の暮れた肉屋のタイル模様を
覚えていますか

川の流れが速くなり
もうすぐ夏祭りがあるから
それも知らせたい
(略)

2001 年につくったこの詩は、西日本の肉屋の冷蔵庫には森が入っているという、むちゃくちゃな設定だ。森をとりだし、まな板にのせるという儀式のようなくだりもある。そんな情景描写のなかで突然、引用したくだりがでてくる。
手紙を動詞にしたいという切実さは、手紙の宛先が死者であるということを示している。手紙という名詞ではもはや追いつかなくなった感情を解放させる動詞、というわけでもなく、声にしたとき、やっとことばが彼方へ飛んで行ってくれるような、そんな気がする。

毎年、お盆月の８月、應典院の墓地で詩のワークショップをひらかせてもらっている。詩をつくってみたいという動機よりも、今年身近に亡くなった人がいるという人も来る。住職による法要のあと、墓地に入り、灯籠をおいて気に入ったところに腰掛け詩をつくる。そして時間になると集まり、朗読がはじまる。死んだ人へ宛てた手紙のような詩、詩のような手紙。なみだで字がにじんでみえなくなって、嗚咽で朗読は中断される。墓地では誰もなにも言わず、そっと待っている。代読することもしない。とぎれとぎれの声。沈黙と声と、沈黙。墓地が月明かりに照らされ、葉すれの音に、ときおり死者たちが聴いてくれている、と感じる。思いがないと声にできないのだと思う。思いは空気をつたって届けられる。

何年もかかってやっと書いて送った手紙がある。死刑囚への手紙だ。
4 年ほど前、映像作家の坂上香さんに誘われ、荒川を渡って東京のはずれにある拘置所に行った。わたしは面会はできず、病院の待ち合い室のようなロビーで待っていた。こどもたちもいたし、テレビ画面にはキューピー３分クッキングが流れていた。ただよく見れば、宅下げや差し入れ店だの、表示に見慣れない言葉をみつける。聞こえてくるお喋りも告訴だの裁判だの、熟語が多い。つづく高い塀。出入りできない人々がいる。一生かかっても。
それから手紙を送ろうと思っているのに送れなかった。なんと書けばいいのかわからなかった。キーボードへ向かえば、なにもなくてもなんとか言葉をひねりだすことができる癖をもっているのに、書けなかった。そして３年かかって結局書いたのは、とりとめのない日常の出来事だった。

毎日が手紙のようである。とりとめのない日常を手紙にして封をして、ポストに投函すると、数日後、届けられる。誰かから。誰かへ。わたしからわたしへ。連続する過去から、つねに手紙を受け取っているし、今日も送りつづけている。死者から。死者へ。沈黙するポストの口から手紙をいれると、今日もコトリと落ちる。律儀な配達人が届けてくれるだろうか。あなたへ手紙む、この気持ちを。

上田假奈代 (詩人)
1969 年奈良県吉野生まれ。2003 年にココルームをたちあげ、毎日が運動会みたいなまま 10 年。おかげさまで毎日おもしろいです。ほんとにいろんな人にであいます。

父への手紙

小学校２年生のとき。
入院している父親に、毎日手紙を書いた。
わたしは川越で、父は以前にすんでいた千葉の病院に入院していた。週末には毎回千葉まで帰っていた。父が肺ガンで余命６ヶ月といわれていたことを、その時の私は知らなかった。

・・・
わたしが生まれたのは、母の実家のある川越の、母も生まれたという助産院だった。里帰り出産だったらしい。そのあと、両親と父方の祖母が一緒に暮らしていた千葉県船橋市の家に帰って、そこで小学校１年生まで暮らした。
川越に、母親と弟と引っ越したのは、小学校１年生から２年生になる時期だったと思う。父親は、仕事の都合で祖母とふたりで千葉の家に残っていた。次の年には、父も川越に引っ越してくる予定だったのだと思う。こどもだったので、説明されなかったのか、それとも説明されたけど全部忘れてしまったのか、その辺りの事情を私はよくおぼえていないのだけれど。
ともかく、父親が病気になったのはその時期だったのだろう。最初は近所の医者で肺炎と誤診されたのだ。そのあとどんどん病状が悪化して、総合病院に診察にいき、進行の早い肺がんだと分かったらしい。その時は、父本人も告知されてなくて、８歳と７歳のわたしと弟には何も知らされず、「大変な病気だ」ということだけいわれていた。
大きな手術をしたのだと思う。そのときは母親、弟、わたし、父親の兄弟の家族と祖母があつまった。千葉の「がんけんびょういん」。その後何度も通うことになるその病院には、隣に大きな芝生の庭があり、カラスノエンドウやオオイヌノフグリがたくさん咲いていて、全員集まった父方のいとこたちと待つ時間の間駆け回って遊んでいた記憶がある。

手術は「成功」した部類に入ったのだろう。余命半年の診断だった父親の肺がんは、寛解した。「10万人に一人の確率だった、と主治医にいわれた」と母親に教えられたのは成人してから、父親が他界してからのことだった。
ともかくこどものころのわたしと弟は、なんにもよくわかっていなかったのだ。父親が大きな手術をして、川越にはしばらく帰って来られない。だから、毎日入院しているお父さんに手紙を書こう。母にそういわれたが､8歳の小学生のこと､宿題も終わって、ご飯も食べてお風呂も入って、もう眠たくなる時間に毎晩毎晩手紙を書かなくてはならないのは、なんだかとても面倒だったことをおぼえている。積極的ではないわたしたち姉弟に、母親は半ば強制のように、手紙を書くことを義務づけていた。
毎日の仕事と、二人のこどもの世話。毎晩の手紙と、毎週末の千葉への小旅行と父親の看病。フルタイムで働く母親がどれだけ必死にそれだけのことをしていたのか、ということは今の年齢になって、やっと少しだけわかってきたように思う。父親は、毎日届くわたしたちの手紙をどんな気持ちで受け取ったのだろうか。毎晩儀式のように繰り返される手紙は、祈りだったのだと思う。祈りのための手紙。内容はたわいのない日常。学校のこと。何を書いたかは、もうおぼえていないのだが、父にはその祈りが届いていたらよかった、と思う。

小手川望
2011年６月から震災と原発事故をきっかけに、現在小学校３年生の娘とココルームにお世話になり埼玉から大阪に移住。えんがわ茶屋こころぎで来訪者に麦茶を出していた。2012年よりココルームスタッフ。演劇の制作をやっていて､「4」という演劇集団を主宰。

釜ヶ崎をあるく。みんなであるく。
あるきながら考える。
あるきながら、であう。
であって、話す。笑ったり、困ったり。

釜ヶ崎まちあるき

ココルームでは、釜ヶ崎のまちあるきのガイドをさせていただいています。
労働者の街、昭和の香りが漂うアーケードの街、社会福祉の街、日常生活に根付いた「表現」が身近に感じられる街・・・。さまざまな顔をもつ釜ヶ崎の街をゆっくり歩いてみませんか。

所要時間：およそ１時間～１時間30分
ガイド料金：１０００円（学生５００円、こども、しんどい方無料）
申し込み：電話、Eメールでお申し込みいただくか、ココルームで直接お申し込みください。

釜ヶ崎にくらす、釜ヶ崎で学ぶ

釜ヶ崎芸術大学

2012年11月～2013年2月に開校します。

学びたいと思う人誰もが学びたいことを学べる大学をこのまちにつくってみたいと思います。

講師（予定）：岩橋 由莉（表現教育）、上田 假奈代（詩）、尾久土 正己（天文学）、釈 徹宗（宗教学）、西川 勝（哲学）、森村 泰昌（芸術）など

※詳しいことが決まったら、ご案内します。

EVENT
PICK UP

ココルーム、カマン！メディアセンター、こころぎでは、日々さまざまなゆるやかなイベント・勉強会・相談会がおこなわれています。お気軽にご参加ください。くわしくは、http://www.cocoroom.org をご覧ください。

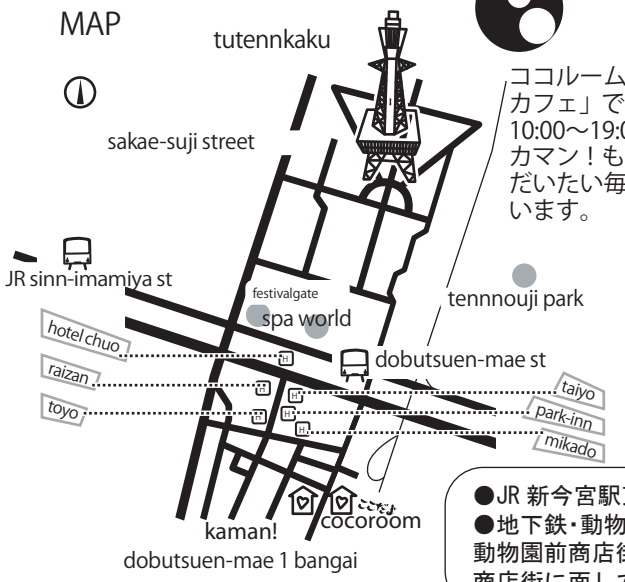
釜ヶ崎冰志会 かまがさき ひょうしかい

月に一回、ココルームに集まってみんなで楽しく俳句をつくっています。参加者の年齢は8歳から 99 歳まで。正式な句会のやりかたにのっとり、投句、選句、披講とすすめ、つくった俳句は、近江八幡市の俳句結社冰志会の選句の対象にもなります。

2012 年9月4日の作品の一部を紹介します

秋の夕帰宅姿や鍬一丁（忠太郎）
でこぼこの月面かくす38万キロ（万葉）
昼の月何も知らない我を知る（裕湖）
釜ヶ崎路上の人と夏の月（とのもと）
りんどうの咲く共同墓にとんぼ行く（かなよ）
秋鮭ときのこを混ぜて米を炊く（さいとう）
カキフライもみじおろしと月に行く（よてつ）
銭鳴らしツキが欲しいと酒を飲む（ヨミビトシラズ）
セミおちるつぎはトンボがとんでいく（りょうこ）
サンマのねけむりごりやくあるかもね（にゃにゃ）
あいしてるゆうこさんはつきにいく（たかお）

MAP



ココルームは「参加型カフェ」です。
10:00〜19:00
カマン！も同じです。
だいたい毎日ひらいています。

●JR 新今宮駅東口から歩いて 7 分。
●地下鉄・動物園前駅 2 番出口から、動物園前商店街を南に歩いて 3 分。商店街に面しています。

まちでつながる。ちょっと生きやすくなろう。

かまがさきの街で
体を動かしたり、詩をつくったり、
暮らしや気持ちについて
気になっていることを
おしゃべりしたりします。

えんがわけんこう相談会

血圧をはかり、お口のケアを学びます

会場 1：カマン！メディアセンター前
日時：毎月第三水曜日 14:00 〜 15:00
10 月 17 日（水）、11 月 21 日（水）、12 月 19 日（水）

会場 2：えんがわ茶屋こころぎ前
日時：奇数月の第一水曜日 14:00 〜 15:00
11 月 7 日（水）

表現のワークショップ

会場：にこにこプラザ
大阪市西成区萩之茶屋 1-10 大阪市営萩之茶屋第 2 住宅 109
●ことばを楽しむ　講師：上田假奈代（詩人）
10 月 11 日（木）14:00 〜 16:00

えんがわおしゃべり相談会

10 月 12 日（日）19:00 〜 21:00
問いながら生きる－境界線／エイズのこと・ジェンダーのこと－
講師：倉田めば（薬物依存回復支援団体「Freedom」代表）、樋口貞幸（NPO 法人アート NPO リンク常務理事）、山田創平（社会学者）

孤独の万有引力 vol.2

一関係の固定化をほぐす いくつかのお話
ゲスト：倉田めば（大阪ダルク施設長）
10 月 31 日 (水)　19:00 〜 21:00
ニカイ！文化センター (カマン！メディアセンターの 2F)
会費：300 円（経済的にしんどい方は無料でけっこうです）
お問い合せ：06-6636-1612（ココルーム 上田）
主催：クィアな会

■ココルームでは、
活動のための寄付をつのっています。

三井住友銀行　天王寺駅前支店　普通1585265
トクテイヒエイリカツドウホウジンコエトコトバトココロノヘヤ

郵便振替　記号01090-5-48059
ココルーム

特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
Non-profit organization The Room for Full of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

インフォショップ・カフェ ココルーム
557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11
tel&fax.06-6636-1612(+81)
info@cocoroom.org
http://www.cocoroom.org
The Information Shop & Cafe COCOROOM
1-15-11 Sannoh, Nishinari-ku, Osaka,JAPAN 557-0001

カマン！メディアセンター
557-0002 大阪市西成区太子 1-11-6
info@kama-media.org　http://www.kama-media.org
KAMAN! Media Center
1-11-6 Taishi, Nishinari-ku, Osaka, JAPAN 557-0002

えんがわ茶屋こころぎ Engawa Chaya Kokotogi
557-0004 大阪市西成区萩之茶屋 2-7-7
2-7-7 Haginochaya ,Nishinari-ku, Osaka Japan 557-0004